



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム

社会的孤立・孤独の予防と 多様な社会的ネットワークの構築

2023年度提案募集に向けたワークショップ

「どのような時に人は孤立・孤独に陥るの？その一次予防の仕組みを考える」

ホームページ公開用報告書



午前の部：

テーマ1 「社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とは？」

開催日時：2023年3月29日（水）9:30～12:30



開催概要：午前の部

- **開催日時**：2023年3月29日（水）9:30～12:30
- **開催場所**（※ハイブリッド開催）：
 - <オンライン視聴> Zoomウェビナー配信
 - <会場参加> JST東京本部B1大会議室
- **テーマ**：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とは？
 - 人はどのような時に社会的孤立・孤独に陥るのだろうか？
 - 社会的孤立・孤独に陥るプロセスや条件とはどのようなものだろうか？
 - まだ顕在化されていないが社会的孤立・孤独に陥るリスクが高い、一次予防が必要な人は誰だろうか？
- **登壇者**：
 - プログラム総括：
追手門学院大学 教授/広島大学 名誉教授 浦 光博
 - プログラムアドバイザー：
東邦大学大学院 看護学研究科 研究科長/教授 岸 恵美子
 - 採択プロジェクト研究代表者：
筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員/筑波大学 名誉教授 松井 豊
 - 採択プロジェクト研究代表者：
神戸大学 大学院人文学研究科 講師 柳澤 邦昭

プログラム：

STEP1：プログラムへの理解を深める

- **イントロダクション（5分）**：開催挨拶、テーマと進め方の共有
- **総括からの講話（20分）**：テーマに関する講話
- **トークセッション（50分）**
 - インスピレーショントーク（20分）：2名の採択プロジェクト研究代表者より、テーマに関するインスピレーショントーク
 - トークセッション（30分）：登壇者でテーマに関する対話
- **質疑応答（10分）**：参加者からの質問への回答
- **事務局からの案内（5分）**
- **休憩（10分）** ※オンライン視聴はここで終了

オンライン視聴/会場参加

STEP2：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況について探索する

- **イントロダクション（5分）**：ワークショップの進め方の再確認
- **ワールドカフェ（50分）**：小グループに分かれ、問いについて3ラウンドの対話
 - ラウンド1&2：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とはどのようなものだろうか？
 - ラウンド3：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況を踏まえると、まだ顕在化されていないがリスクの高い一次予防が必要な人は誰だろうか？
- **各グループからの共有（15分）**：ワールドカフェでの各グループの内容を全体で共有
- **クロージング（10分）**：登壇者からのコメント、事務局からの案内

会場参加のみ



トークセッション-1：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とは？

登壇者：

- プログラム総括：
追手門学院大学 教授/広島大学 名誉教授 浦 光博
- プログラムアドバイザー：
東邦大学大学院 看護学研究科 研究科長/教授 岸 恵美子
- 採択プロジェクト研究代表者：
筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員
/筑波大学 名誉教授 松井 豊
- 採択プロジェクト研究代表者：
神戸大学 大学院人文学研究科 講師 柳澤 邦昭

対話録：

**0次予防として、社会的孤立・孤独に陥らないために、
企業や大学などの組織にどのような仕組みがあると良いのか？**

- 岸）高齢者の孤立や障がいのある若年者の孤立、セルフネグレクトについて研究しているが、インスピレーショントークから共通点を感じた。特に松井さんのインスピレーショントークの中高年のひきこもりに関して、社会的ひきこもりから高齢者となって、セルフネグレクトに陥る人がいる。高齢者の孤立やセルフネグレクトを予防するために、職場内での孤立の予防が重要になると感じた。柳澤さんのインスピ

レーショントークでは、自身も大学に勤めているので、コロナが集団に影響したこと、大学の組織体制が学生の孤立に影響を与えると感じた。0次予防として、社会的孤立・孤独に陥らないために、企業や大学などの組織にどのような仕組みがあると良いのか？環境づくりが大事ではないかと考えており、高齢者であれば居場所づくりなどが進められている。

- 浦）ウェビナーのQ&Aでも0次予防と一次予防の違いについて質問があったが、0次予防、一次予防、二次予防の明確な定義はまだできていないのではないかと考えており、できるだけ早い段階で社会的孤立・孤独を予防することを目的とすると、あえて言うのであれば0次予防は、社員が孤立・孤独に陥らないような企業の風土づくり。そのような風土の中でも、孤立・孤独に陥っている人がいるのであれば、どのように介入することで防げるかが一次予防。
- 松井）具体的な仕組みづくりは、企業と連携しながら今後取り組んでいこうとしている。今わかっていることは、新入社員に対して先輩社員がメンターとしてつくことがあるが、それは1対1の関係。職場の孤立・孤独に対しては、弱めではあるが、職場の雰囲気の影響していることがわかっている。浦さんの言うように、1対1の関係性だけでなく、職場全体で支えていくような風土づくり、文化づくりが重要であると考えている。どうすればできるかは、企業規模や業種にもよるので、今後企業の方にヒアリングしていく。例えば、運動会の実施が効果があるのかなど。



トークセッション-2：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とは？

0次予防として、社会的孤立・孤独に陥らないために、企業や大学などの組織にどのような仕組みがあると良いのか？（続き）

- 柳澤）大学では縦のつながりが実は大事だと考えているが、横のつながり作りは多くの大学で行われているが、縦のつながり作りはバラつきがある。コロナ禍でつながりを作るためのイベントが一斉に中止されてしまっており、それもネガティブな影響があったと考えている。多くの大学を調査してわかったことは、大学の上層部が孤立・孤独に関心の高いところと、そうでないところがあるということ。教員個人だけでなく、大学全体として孤立・孤独に興味関心を持てるか。孤立・孤独に関するデータを提供することで、危機感を持ってもらい、改善を考えていくきっかけが作れると思っており、それが多くの大学で0次予防に取り組むことにつながるのではないかと。

孤立・孤独であることに気づかない人に気づかせるアプローチとは？

- 岸）総括からの講話でも「孤立・孤独であることに気づかない人を気づかせるのが重要である」とのことだが、大学でも職場でも気づかない人がいるのではないかと。気づかせるために、松井さんも主観的指標と非主観的指標を開発していると思うが、気づかない人を気づかせるためのアプローチとは？
- 松井）どのようにフィードバックし、本人のアクションにつなげていくかは、企業の方と一緒に考えていこうとしている。職場ではメンタルヘルスのチェックが行われているが、それが機能している会社とそ

うでない会社のバラつきがある。「あなたは孤独」と伝えるのではなく、「一人の傾向が強い」と伝えるなど、本人がアクションを起こす気持ちになるような返し方を考えたい。

- 柳澤）気づかない人を気づかせるのは、本当に難しいこと。若者は、孤立・孤独であることにに対して恥じらいがあり、言い出しにくくさせている。どのような人が孤立・孤独に陥りやすいか情報提供をしたり、孤立・孤独に関して話す場があるといいのではないかと。恥ずかしいことではなく、普通に話せる社会になることで、気づきやすくなるのではないかと。
- 岸）研究の中ではリスクの可視化に取り組んでもらっているが、可視化しても自分のことだと気づかない人もいる。気づかない人にいかに気づいてもらうか、今後も研究を進めていってほしい。
- 浦）孤立・孤独であることを積極的に出すことの重要性は、初年度の提案募集ワークショップに登壇された岡先生の事例にもあがっていた。徳島県海部町は日本で一番自殺が少ないまちであるが、「病は市に出せ」がまちの規範として浸透している。それによって、しんどいことが可視化され、周囲から有形無形のサポートを受けられ、結果として自殺率が日本で一番低い。このような風土をいかに作っていくかが0次予防としては重要である。また、一つの組織や地域の中に、濃い関係性とゆるやかな関係性の両方があるような、多様性のある状況を作っていくことが重要ではないかと。



トークセッション-3：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とは？

どのような環境の変化が、社会的孤立・孤独に陥りやすくさせるのか？

- 柳澤) ポストコロナは考えないといけないのではないか。学習環境や働く環境など、変化している。予測が難しいものではあるが、どのような社会環境変化があるかということを鑑みながら、孤立・孤独の予防に取り組んでいく必要がある。
- 浦) リアルやオンラインなどつながり方が多様化している。つながり方の選択肢を増やしておくことは、孤立・孤独の予防において有効だと思う。
- 松井) 終身雇用が崩れているため、若年層の就労期間が短くなり、対人関係が作りにくくなっているのは大きな変化。ウェビナーのQ&Aにもあったのだが、IT業界や単独業務を行なっている人が孤立・孤独になりやすいことは、企業ヒアリングから理解している。フォローアップのシステムを作ることが重要であると感じている。
- 岸) 松井さんのインスピレーショントークにあった「役立ち感」が孤立・孤独に影響するというのは、良い研究成果だと思う。「役立ち感」を持ちにくくなる環境変化とは、どのようなものだろうか。例えば、新入社員や、定年退職した人など。環境の変化と、喪失体験など個人のライフイベントがリンクすることで、孤立・孤独になりやすくなるのではないか。個人のライフイベントも重視していくのが大事ではないか。



質疑応答

質問) ゆるやかなつながりの具体例は？それは組織として、地域として、意図的に作ることができるのか？

- ・ 浦) ゆるやかなつながりを意図的に作るのは難しいこと。地域であれば、婦人会や老人会のような地縁・血縁的なつながりだけでなく、自然発生的なボランティアなつながりなど、多様なつながり方を意図的に作ることは可能ではないか。加えて、つながりを本人の志向性に応じて選ぶことができること。ある程度は、行政も重要な役割を担うと思う。地域行政も、当事者意識の高い市民のボランティア組織を立ち上げることへの関心が高く、連携できるのではないかな。

質問) 0次予防・一次予防・二次予防は、予防医学における定義と異なることを明確化した方がいいのではないかな。風土づくりに関して、その地域ならではの文化や特性をふまえて考える必要があるのではないかな？

- ・ 浦) 0次予防・一次予防・二次予防の言葉の使い方は気をつけたい。風土づくりに関する歴史性を無視できないのは、その通りである。先ほど紹介した岡先生の著書でも、海部町の事例をそのまま他の地域に持っていくことはできないだろうと書かれている。一般化だけでなく、地域や企業組織などの対象ごとに適用する上で特殊性を考慮することは、もちろん重要である。現在13プロジェクトが採択されているが、両方のアプローチがされている。

質問) 0次予防と1次予防の違いは？

- ・ 浦) 0次予防、一次予防、二次予防の明確な定義はまだできていないのではないかな。できるだけ早い段階で社会的孤立・孤独を予防することを目的とすると、あえて言うのであれば0次予防は、社員が孤立・孤独に陥らないような企業の風土づくり。そのような風土の中でも、孤立・孤独に陥っている人がいるのであれば、どのように介入することで防げるかが一次予防。（※トークセッションより抜粋）

質問) IT派遣会社の産業医をしているが、社員の孤独感は強いと感じる。どのような対策が可能かな？テレワークの場合は孤独感が特に強く、業務連絡の困難さとIT業界独特の性質もあると思う。

- ・ 松井) IT業界や単独業務を行なっている人が孤立・孤独になりやすいことは、企業ヒアリングから理解している。フォローアップのシステムを作ることが重要であると感じている。（※トークセッションより抜粋）

質問) 松井先生のインスピレーショントークにあった「企業を対象とした研修」は一般的に募集しているかな？

- ・ 松井) 4月下旬か5月の連休明けに企業の募集を開始する。「筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター」のWEBサイトで、検索をしていただきたい。（※ウェビナー上での回答より）

質問) 高齢者より働き盛りの人の社会的孤立・孤独が多いとの話があったが、健康経営を進めている企業など、企業とのコラボは予定しているかな？企業の協力が得られれば、より社会的なインパクトも大きくなるのでは。

- ・ 松井) 企業と一緒に研修や勉強会をする計画がある。（※ウェビナー上での回答より）

質問) 役立ち感（心理学的には自尊感情？）について、ゆるやかなつながりやWEB上でのつながりを役立ち感に繋げるには効果が弱い様な気がするがどうか？

- ・ 松井) 役立ち感は、職務に関連する部分が大きいのかな（自尊感情より、居場所感、所属感、効力感などに近い）、職務に関する働きかけが有用。（※ウェビナー上での回答より）



ワールドカフェの各グループからの共有

ワールドカフェの問い：

- **社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とはどのようなものだろうか？**
- **社会的孤立・孤独に陥りやすい状況を踏まえると、まだ顕在化されていないがリスクの高い一次予防が必要な人は誰だろうか？**

グループ1

- 職場にフォーカスして対話した。人事異動でメンバーが変わると雰囲気が変わって発言しづらい、上司が変わると雰囲気も変わり話しにくくなるなど、孤立が起こる。組織として見た目ではつながっているようでも、深いところに問題があったりする。家族の中でも実は孤立していることがある。
- 貧困や社会的な原因に起因するもの、日本的な価値観でつながりを作りづらい要因もある。社会の中で孤立・孤独の人を顕在化させようというのではなく、もともといるという社会的リスクを前提としたルール、仕組みづくりが必要ではないか。

グループ2

- 社会的な背景、プロセス、個人の価値観、感じ方など、いろいろな要因があるが、物理的な環境が変わるタイミングで孤立が起きやすい。社会側が孤立を生み出していることも多く、社会的な要因にも目を向けることが重要である。また、リーダーを支える周囲の環境や困っていることにも目を向ける。困っている人は顕在化している人で、孤独に感じる。

グループ3

- 会社の話が多く、転勤で孤立したり、会社以外でのつながりが作りづらいことが起きる。夫婦別姓も海外では問題にならない。相対的貧困がある地域だと、情報にアクセスすることも難しい。子供がいると、他者に迷惑をかけているという自覚があり、社会から離れてしまい、結果孤立してしまう。



クロージング：登壇者からのコメント

採択プロジェクト研究代表者：

神戸大学 大学院人文学研究科 講師 柳澤 邦昭

- 熱量が伝わってきた。この熱量をもってすれば、孤立・孤独は予防できるかもしれない。社会的孤立・孤独は定義が難しく、どう議論すればいいかが難しい。定義が1つではないかも知れない。どう定義すればいいかも、このような場で議論できるというのではないか。

採択プロジェクト研究代表者：

筑波大学 働く人への心理支援開発研究センター 研究員
/筑波大学 名誉教授 松井 豊

- 貧困の問題があがったが、自分は下町出身で、子どもの頃は今より社会全体が貧困だったと思うが、孤立・孤独をあまり感じなかった。収入と恋愛・結婚が結びついていると言われるが、格差が明確になってきているのが現代の特徴。貧困が孤立・孤独の原因になっているのは現代的なことなのではないか。

プログラムアドバイザー：

東邦大学大学院 看護学研究科 研究科長/教授 岸 恵美子

- 高齢者では、孤立と孤独の定義は分けている。孤立は、必要なサービスを受けられないと命に関わってくる。
- つながりたい人が、どこでつながれるか。夕食を一緒に食べる「こども食堂」の大人版など、自分の居場所があると感じられる多様なアプローチが必要。行政だけでなく、趣味や喫茶店など多様な場があると役立ち感も得られる。

プログラム総括：

追手門学院大学 教授/広島大学 名誉教授 浦 光博

- 孤立している人がいる前提で社会を考えていく。そうしないと、孤立が良くない、孤独は避けるべきものだと思ってしまう。「おひとりさま」は、天才的な発想。ポジティブでニュートラルなイメージをつくれた。また、お一人で生きている人に、社会の関心が向くようになった。孤立・孤独は恥ずかしい隠すことではないという認識を共有できる社会のあり方を探っていくことが重要ではないか。

参考：ワールドカフェ グループ^o1の記録





参考：ワールドカフェ グループ2の記録



[illegible]



参考：会場の様子（STEP1）





参考：会場の様子（STEP2）



ワールドカフェ



ワールドカフェ



ワールドカフェ



ワールドカフェ



SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
社会的孤立・孤独の予防と
多様な社会的ネットワークの構築

午後の部：

テーマ2「一次予防につながる社会的仕組みとは？」

開催日時：2023年3月29日（水）14:00～17:00



開催概要：午後の部

- **開催日時**：2023年3月29日（水）14:00～17:00
- **開催場所**（※ハイブリッド開催）：
 - <オンライン視聴> Zoomウェビナー配信
 - <会場参加> JST東京本部B1大会議室
- **テーマ**：一次予防につながる仕組みとは？
 - 一次予防につながる社会的仕組みとしてどのようなアプローチがありえるのか？
 - そこに何らかの原則を見出すことができるのか？
- **登壇者**：
 - プログラム総括：
追手門学院大学 教授/広島大学 名誉教授 浦 光博
 - プログラムアドバイザー：
元 日本大学法学部 教授 稲葉 陽二
 - 採択プロジェクト研究代表者：
東京大学 大学院医学系研究科 特任教授
/東京大学 名誉教授 川上 憲人

• プログラム：

STEP1：プログラムへの理解を深める

- **イントロダクション（5分）**：開催挨拶、テーマと進め方の共有
- **総括からの講話（20分）**：テーマに関する講話
- **トークセッション（50分）**
 - インスピレーショントーク（20分）：アドバイザーと採択プロジェクト研究代表者より、テーマに関するインスピレーショントーク
 - トークセッション（30分）：登壇者でテーマに関する対話
- **質疑応答（10分）**：参加者からの質問への回答
- **事務局からの案内（5分）**
- **休憩（10分）** ※オンライン視聴はここで終了

オンライン視聴/会場参加

STEP2：一次予防につながる社会的仕組みづくりについて探索する

- **イントロダクション（5分）**：ワークショップの進め方の再確認
- **ワールドカフェ（50分）**：小グループに分かれ、問いについて3ラウンドの対話
 - ラウンド1&2：一次予防につながる社会的仕組みとして、どのようなアプローチがありえるのか？
 - ラウンド3：一次予防につながる社会的仕組みを構築する上でのポイントは？
- **各グループからの共有（15分）**：ワールドカフェでの各グループの内容を全体で共有
- **クロージング（10分）**：登壇者からのコメント、事務局からの案内

会場参加のみ



トークセッション-1：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とは？

登壇者：

- プログラム総括：
追手門学院大学 教授/広島大学 名誉教授 浦 光博
- プログラムアドバイザー：
元 日本大学法学部 教授 稲葉 陽二
- 採択プロジェクト研究代表者：
東京大学 大学院医学系研究科 特任教授
/東京大学 名誉教授 川上 憲人

対話録：

一次予防のための仕組みづくりで川上プロジェクトに期待すること

- 浦) 本プログラムではPoCまでを一体的に推進することを謳っているが、既に二次予防の取り組みをされている方々が一次予防の重要性に気づき、このプログラム応募するケースが多い。ただ推進していくうちに、一次予防を忘れがちになることもある。二次予防を否定するわけではなく、このプログラムの中で取り組んではいけないわけではなく、二次予防の取り組みの中で一次予防にしっかり焦点をあて、ヒントを得て社会実装することを期待している。その観点において、川上プロジェクトは一次予防にしっかり焦点をあて、関係者との対話を通じて仕組みを社会実装しようとしている。しかし、5年という期間でやり遂げるのはなかなか難しいのも事実。プログラムとして最低限社

会実装として求めていることは、一次予防の仕組みを関係者に対してプレゼンテーションし、1つでもいいので試してもらうこと。効果があれば、関係者のネットワークで広がっていくだろう。プログラムとしても、社会実装には最大限協力していきたい。

- 稲葉) 川上プロジェクトに特に期待しているのは、仕組みや制度を変えることであり、例えば経営者の評価方法が変われば大きな変化だと思う。日本経済はバブルで落ち込んだが、大学進学率は大幅に上がっており、人的資本の質は上がっているはずである。一方で、労働分配率は変わっておらず、そこが大きな課題ではないか。
- 浦) 経産省が人権デューデリジェンスを進めており、そのような文脈においても期待している。
- 川上) ESG投資や人的資本投資の考え方は上場企業には関係するが、中小企業には影響が及びにくい。また、人権デューデリジェンスも、何をしなければいけないかまだ決まっていない状況。他にも、健康経営の中で取り組もうとすると、孤立・孤独を健康のたぐいに対策しようという枠組みでいいのかジレンマがある。このように具体的な行政施策と合わせようとする細かいチューニングが必要であり、それを頑張っているところである。
- 稲葉) 社会実装にはエビデンスが必要になるので、当然そのような取り組みが求められるだろう。



トークセッション-2：社会的孤立・孤独に陥りやすい状況とは？

登壇者：

- プログラム総括：
追手門学院大学 教授/広島大学 名誉教授 浦 光博
- プログラムアドバイザー：
元 日本大学法学部 教授 稲葉 陽二
- 採択プロジェクト研究代表者：
東京大学 大学院医学系研究科 特任教授
/東京大学 名誉教授 川上 憲人

対話録：

社会実装に向けたステークホルダーとのネットワーク作り

- 川上) もともと日本生産性本部と「ポジティブメンタルヘルス」の普及活動に取り組んでおり、それをベースに関係者会議を構成した。特定の地域や特定のグループに対して取り組む場合には、ステークホルダーとのネットワーク作りに工夫が必要かもしれない。社会階層の研究プロジェクトでは、新聞広告でステークホルダーとなる市民に呼びかけたこともある。このプログラムでは、戦略的にステークホルダーを集める必要があるのではないかな。一般的な意見というより、仕組みを最終的に使ってもらうユーザーの声を聴くことが重要ではないかな。
- 稲葉) 須坂市の保健補導員制度の例では、日々の生活の中で家族の健

康を気にかけている母親をうまく取り込んだ。みんなで話し合っていくと、悩んでいるのは自分だけでないと気づき、つながりが生まれていった。保健補導員の任期は2年だが、任期後も活動を何らかの形で続けていこうという人が生まれ、世代間交流の場にもなった。最初はやりたくないと思っていた人も、気楽な会に参加してみると楽しそうだと思うようになる。市民会館で周年イベントが行われると、OGで会場がいっぱいになる。5万人のまちで、累計で経験者が7000人、主婦層の1/4が経験者。このようにして健康づくりのネットワークが構築された。日常生活に即して、みんなの意識にうまくはまることが重要。強制的にはできないので、趣味のサークルなどの活動もとても重要。

- 浦) 行政と連携して地域防犯のボランティアグループを立ち上げた経験があるが、将来的に行政がいなくても自立的に運営できるようになることが重要。行政と連携する上では、行政の縦割りが課題となり、本当に必要な人に届かないということがあるが、組織の縦割りを超えた個人的なネットワークが解決の鍵になる。地域防犯では平和な状態が続くと活動が停滞してしまうので、地域防犯における市民のボランティアグループの重要性を伝える講演などを定期的に行っていた。



質疑応答-1

質問）実際、様々な点で経営者・管理職とその他多数の従業員の意見に大きな齟齬が生じているのが実状。従って、社会実装を念頭に置いた場合、企業の99.7%を占める中小企業の中で展開させていくためには、経営者よりも実質的な影響を受ける従業員の意見の聴取が不可欠であると考えが、そのような視点について研究の中ではどのように反映させているのか？

- ・ 川上）プロジェクトでは、人的資本経営の中心となる一部上場企業を対象にしており、労働組合を通じて従業員の意見を聴取している。中小企業は取り組みが遅れているが、中小企業の労働組合団体からの聴取を考えている。労働組合の意見は従業員の意見ではないという考えもあると思うが、まず最初のステップとして取り組んでいる。また公開シンポジウムなどでも、従業員の意見をできる限り聴いていきたいと思っている。

質問）総括からの講話にも、孤立・孤独の予防には共助が重要という指摘があったが、共助の担い手にあげられる町内会・自治会の役員の人たちは、特に地方都市だと高齢男性の方が多く、パワハラ体質の人も少なくないと感じている。企業もだが、地域社会も個を強調する価値観に移行していかないと、孤立・孤独を防ぐ共助は機能していかないように思う（町内会などへのハラスメント研修などが必要に感じている）。共助のあり方についてご意見いただきたい。

- ・ 浦）地域において個を大切にしたいボランティアなグループを立ち上げるのは難しい課題である。ただ、地域の歴史や伝統を無視して、パワハラ体質の人を排除しようとするのも上手く機能しない。折り合いをつけながら、新たな共助の仕組みを作っていくことが必要。何か起きた時に、パワハラ体質と言われていた人が大いに貢献してくれることもある。パワハラ自体はなくす必要があるが、そのような人を排除するのは新たな孤立・孤独を産む。

- ・ 稲葉）上田プロジェクト<<https://www.jst.go.jp/ristex/koritsu/projects/01.html>>で、関係流動性について取り上げている。関係流動性というのは、組織の対人関係の選択肢が多いかどうか。この質問は、つまり関係流動性は低いということ。多様な出会いの場があり、そこから選択できるようになると、関係流動性が高くなる。関係流動性を高める社会というのが理想。既存の団体や制度が未来永劫続くのではなく、必要に応じて淘汰されていく仕組みが重要ではないか。ちなみに、関係流動性を世界で比較研究したところ、日本は最低レベルとのこと。関係流動性は、稲作の稲の作付け面積が大きいほど低くなるそうで、日本が最低レベルの理由。

質問）川上プロジェクトを詳しく知ることができるWEBサイトなどはあるか？

- ・ 川上）川上PJのサイト。<https://kodoku-ristex.m.u-tokyo.ac.jp/>



質疑応答

質問）第三次産業従事者率は回答者の世代など他の変数と交絡していないのか？

- ・ 浦）交絡変数については、現状のデータで確認できる範囲で考慮に入れて分析している。世代の交絡はないと思うが、把握できていない交絡変数のある可能性は否定できない。（※ウェビナー上での回答より）

質問）総括からの講話の産業構造別の分析結果はとても意外で、興味深いものだった。一方、第三次産業従事者人口の多い都道府県居住者の分析結果と、第三次産業従事者の分析結果とでは傾向が異なるようにも思える（地域構造（マクロレベル）の効果と従事者環境（ミクロレベル）の効果とが異なるようにも思えた）。従事者の分析結果もあれば教えてほしい。

- ・ 浦）ご指摘の通り、ミクロレベルの効果の検証が必要であると考えている。現状のデータでは、回答者のついている職業が把握されいないので、今後の検討課題になると考えている。次の調査では、今回の仮説検証に焦点を当てるつもりで、ミクロマクロ両面からの検証を行っていく。（※ウェビナー上での回答より）

質問）総括からの講話で、WEB調査（アンケート）を外部委託したとあったが、被験者の偏りや解釈の相違について教えてほしい。また、面談調査との組み合わせの有無・実施状況についても教えてほしい。

- ・ 浦）面談調査の必要性は感じているが、現状は一人でデータを積みあげている状況。今後の課題と認識している。（※ウェビナー上での回答より）

質問）「孤独・孤立をうまないための、ものの考え方を整理」とても大事だと思った。概略を教えてほしい。説明した文献などがあれば教えてほしい。

- ・ 川上）川上PJのサイト。<https://kodoku-ristex.m.u-tokyo.ac.jp/>（※ウェビナー上での回答より）

質問）経営者の評価システムを作ると聞いたら、経営者に不利と思うようになりやすいが、実際は多くの経営者自身がむしろ一番評価システムを望んでいるのではないか。それを作ることによって経営者の「理不尽」もはっきりするのではないか。

- ・ 川上）システムは別目的で作成されるかもしれないが、その中に自分たちの目指す活動を、どう関係者の同意を得ながら入れ込んでゆくかが醍醐味だと感じている。（※ウェビナー上での回答より）

質問）孤独・孤立に限らず、心理的アンケート調査の難しいところは、①被験者がアンケートの意義をよく理解しないまま時間を使っていることがあること、②結果をどのように被験者にフィードバックするか。何か良い考えはあるか？

- ・ 川上）学会発表を行って意見を聴取する活動も実施予定。（※ウェビナー上での回答より）



ワールドカフェの各グループからの共有

ワールドカフェの問い：

- 一次予防につながる社会的仕組みとして、どのようなアプローチがありえるのか？
- 一次予防につながる社会的仕組みを構築する上でのポイントは？

グループ1

- 多様な選択肢があり、多様な関係性を作っていくことが重要ではないか。また、過去とのつながりを考えた関係資本をどう作るか。完全に新しいものではなく、過去のものをどう再構築していくか。「学びほぐし」など自分の考えも更新する。
- 当事者を見て理解し、受け入れ、否定しないプロセスが大事。

グループ2

- 個別のターゲットへのアプローチと、仕組みを広く浅く提供するアプローチがあるのではないか。まずは個別から始まっていくと感じている。ただ、個々のターゲットに対してやっていることを閉じず、他に開き、他の人の協力を求めないと孤立・孤独の問題は解決できない。
- いろいろな当事者・自助グループがあるが閉鎖的。選べるようにできるといいのではないか。また、その中に入るのにはパワーやエネルギーがいる

が、信頼してもらうために、本人に入ってきてもらえるような基盤づくりが必要。それが0次予防につながる。

グループ3

- 物理的に人をつなげる方法としてメタバースや、公共交通のドライバーがハブになるのではないか。
- 社会実装は、現場と法律の間にある。
- 楽しいことをやっている、共通して話せる楽しめる場を作ることが大事ではないか。そうすると安心感を持って来てもらえる、安心感を持つことで相互作用で信頼関係を作り、人と関われる社会になっていく。声を出せる社会、声をかけられやすい、人に対しても余裕がある社会。社会に余裕があると孤立している人が声をかけられやすくなる。

グループ4

- 大前提として、孤立・孤独の人が、本当に何に困っているのかアセスメントが重要ではないか。
- 社会の中に色々な選択肢を作り、社会に選択肢がたくさんあることを認める価値観をつくる。自分を表現できるアートや音楽の場など、心の中にあるものを出せる機会が必要ではないか。当事者だけでなく他の人にも受け入れられる、子ども食堂やサロンなどふらっと立ち寄れる場所。体験できる場をつくって、自分を表現できる、できなくても興味を持ったり夢中になれるきっかけを社会にたくさん作り、交流の糸口をつくってオープンにすることでそれぞれがつながりやすくする。



クロージング：登壇者からのコメント

採択プロジェクト研究代表者：

東京大学 大学院医学系研究科 特任教授

/東京大学 名誉教授 川上 憲人

- 多様な視点から多様なアイデアが出た。孤立・孤独の対策をする上で、一般的なソリューション、日本全体に通じる解決策は難しく、今は個別対応しかないのではないかな。個々のターゲットに対応した個別のプロジェクトをつないで、ノウハウや方向性を共有することが大事だと考えている。
- 理念としてゆるやかなつながりの社会を作ることが大事だと思う。その上で、具体的に落とし込んで、根拠となる法律や現在の仕組みと紐付ける。いかに行政に使ってもらうかが勝負所ではないかな。

プログラムアドバイザー：

元 日本大学法学部 教授 稲葉 陽二

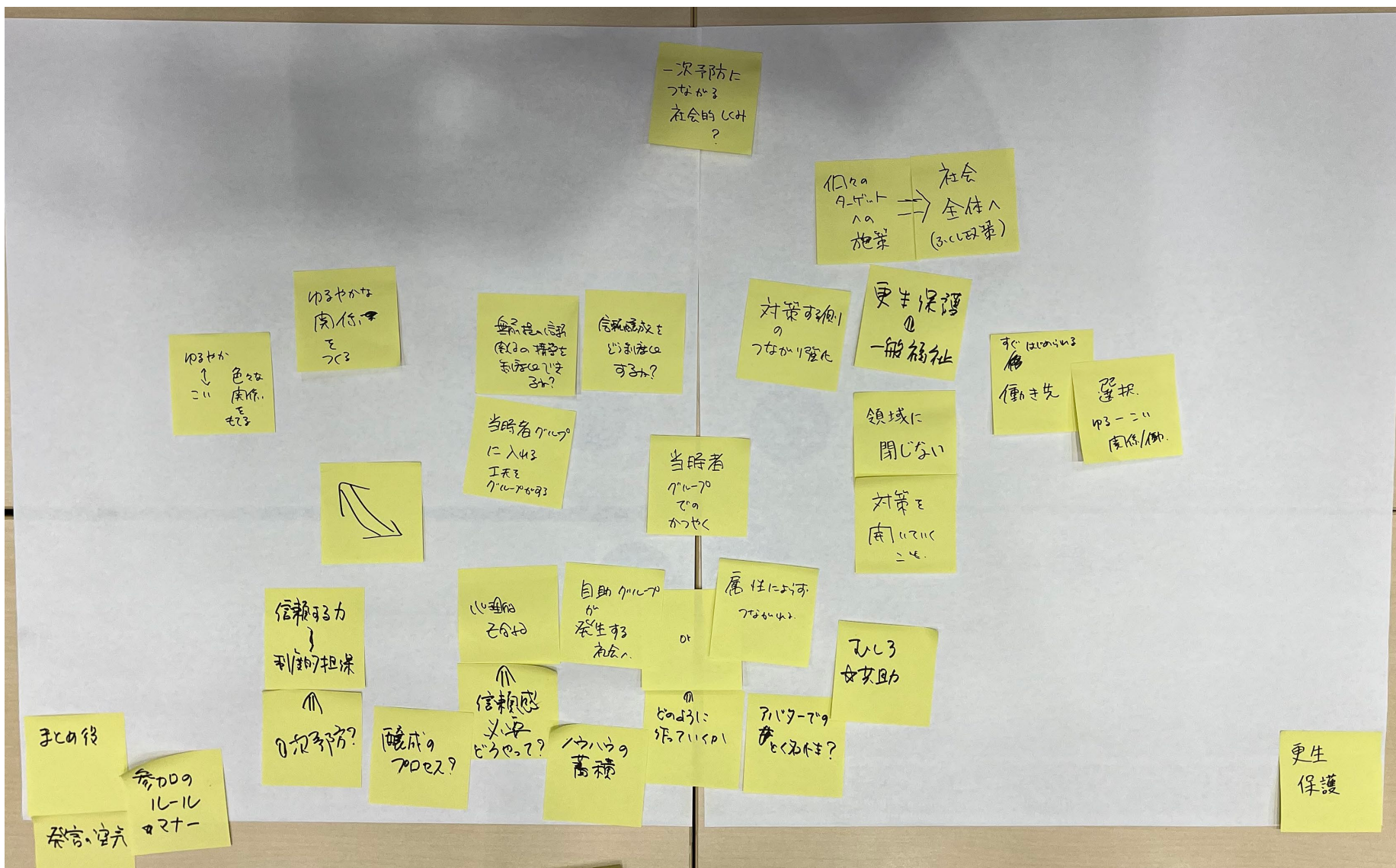
- 政府が総合知と言いつ出したが、総合知はこういう場でこそ作られる。制度や法律をつくる以前に、こういう場で世代や性差や肩書を気にせず、それぞれの人に発言機会を作る。この場がすでに仕組みであり、このような取り組みを続けていくことが重要ではないかな。

プログラム総括：

追手門学院大学 教授/広島大学 名誉教授 浦 光博

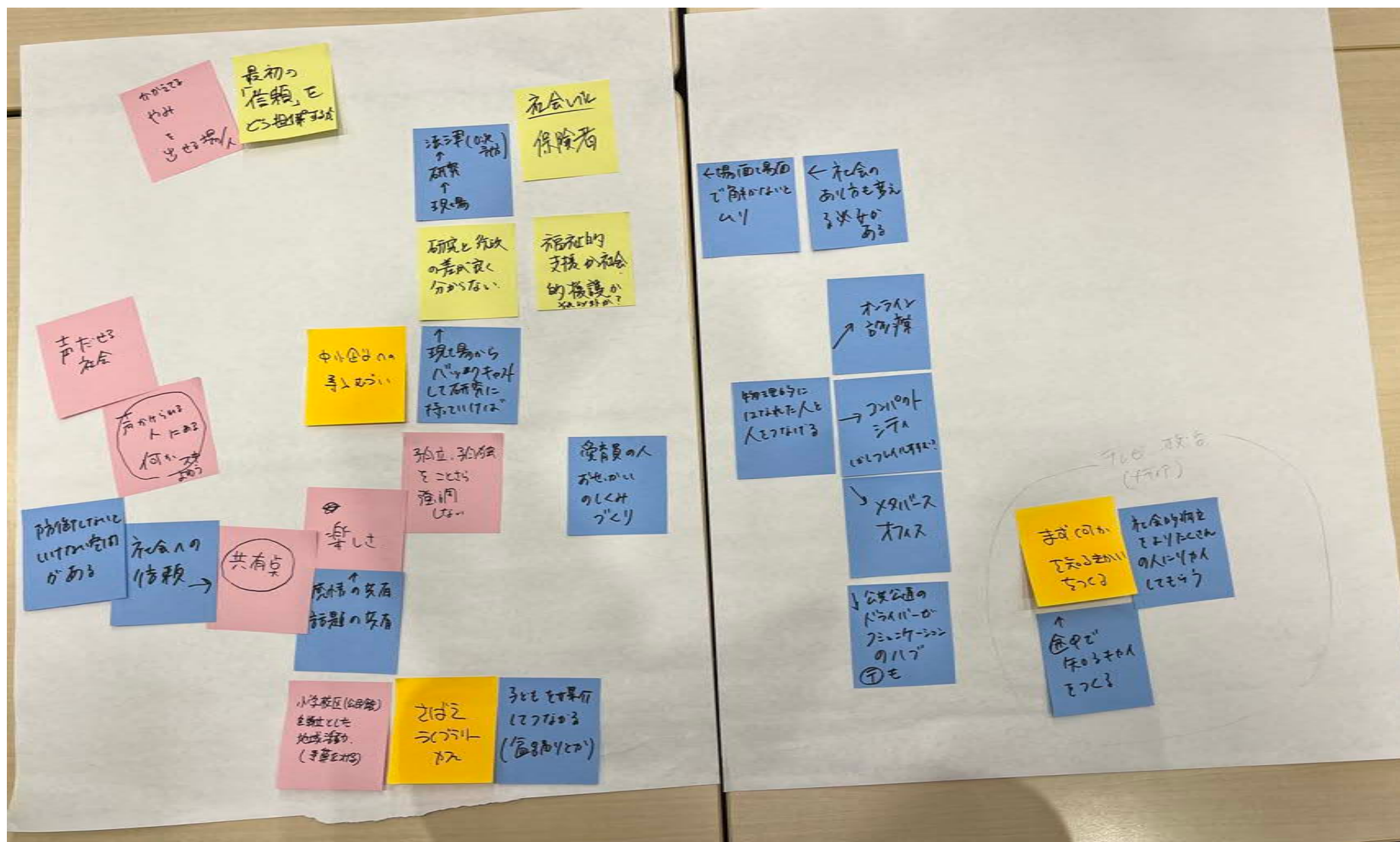
- それぞれの活動がそれぞれの中で閉じず、連携することが重要である。それぞれの活動が成功すると成功体験に捕らわれ閉じてしまうが、一歩離れて見られる研究者や行政がゆるやかにつないでいくことが求められている。

参考：ワールドカフェ グループ²の記録

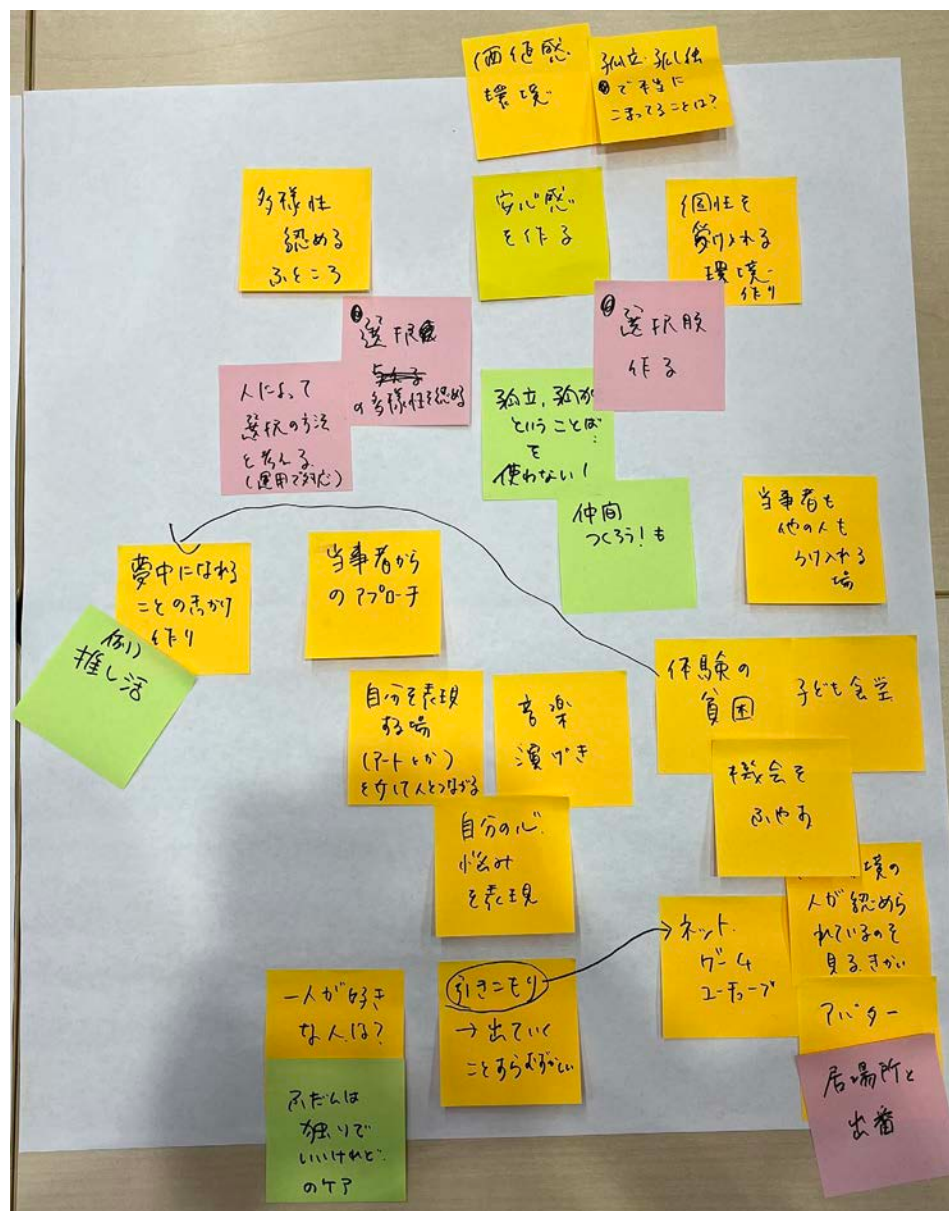




参考：ワールドカフェ グループ3の記録



参考：ワールドカフェ グループ^o4の記録





参考：会場の様子（STEP1）





参考：会場の様子（STEP2）



ワールドカフェ



ワールドカフェ



ワールドカフェ



ワールドカフェ